

平成 29 年度 年報



市川福治氏 豆木魚

大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

目次

1	ごあいさつ _____	1
2	わたしとワッハ上方 _____	2
3	大阪府立上方演芸資料館運営状況（平成29年度） _____	5
4	所蔵資料の紹介 _____	15
5	資料紹介（資料整理の現場から） _____	25
6	大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等 _____	35



表紙の写真 豆木魚

あほだら経を演じる時に、指に挟んで叩きながら拍子をとる道具。
市川福治（いちかわふくじ、1904年～1976年）の使用していたもの。
福治は広島生まれ、もとは歌舞伎の女形、後に剣劇やダンス、レビューの一座を結成し地方巡業。
さらに漫才転向。器用に種々の芸をこなした一つがあほだら経だった。

ごあいさつ

大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方は、平成5年に漫才師である砂川捨丸師匠の遺品である「鼓」が大阪府に寄贈されたことをきっかけとして、平成8年の11月に上方演芸発祥の地といわれる「ナンバ」の現在地に設立をされました。

以来、21年の歳月を経ましたが、この間、大阪府の非常に厳しい財政状況を背景とした行財政改革の取り組みの中で、存続や運営主体をめぐって庁内で激しい議論が展開されてきました。

現ワッハ上方は、「上方演芸の発祥から現在までの歴史を伝えていけるよう、継続的に資料を収集し、幅広い人々が活用できる形で蓄積していくべき」という大阪アーツカウンスルの提言を踏まえ、平成27年度から大阪府の直営として、収蔵資料の内、約5万4千点の登録資料を3年間で整理することを目標として、鋭意取り組んでまいりました。

館外展示の取り組み等と併せ、タイトなスケジュールでありましたが、無事目標どおり、今年度、分類作業を終えることができました。

平行して、昨年度から、今後のワッハ上方のあり方につきまして、これまでの経緯等を踏まえつつ、検討を進めてまいりました。

その結果、来年度には、全国で唯一の演芸資料館であるワッハ上方を、大阪人のアイデンティティの一つである「笑い」をはじめとする上方演芸の文化を守り、継承する重要な拠点と位置づけ、大阪が培ってきた「笑い」の魅力を、広く発信していけるよう、現施設をリニューアルすることといたしました。

府民はもとより外国人旅行者にも上方演芸に触れ、その魅力を体験していただくことで、新たな大阪の文化創造につながる、ワッハ上方がそのような施設となるよう、がんばってまいりますので、放送関係者の他、これまでワッハ上方を支えていただいた関係者の皆様方には、引き続き、ご理解、ご協力をお願いいたします。

最後に、本報で、こうした平成29年度のワッハ上方の取組をご紹介させていただくことにより、ワッハ上方を、より理解し、興味を持っていただく一助になれば幸いです。

館長 大河内 隆生

わたしとワッハ上方

成瀬 國晴（イラストレーター）

大阪・日本橋三丁目で生を得たわたしにとって、もの心がついた頃から「千日前」や「新世界」界隈は遊び場だった。

道具屋筋を抜けて千日前、南海通りを歩き、精華国民学校へ通学していた。

その頃、いまワッハ上方（大阪府立上方演芸資料館）があるビルのところは新金比羅宮だった。

この宮の北側にあった路地を抜け、南海通りに入るショートカットもよくやったものだ。

いまは、ワッハ上方の入口にあるゲームセンターに入りゲーム機の中を右に折れ、正面入口から南海通りに入ることを時々やるが、往時の路地は既に無いため、こうして昔の思い出を辿るしかない。

この路地から南海通りに入る右側には「いとし・こいし」師匠らが出ていた漫才の「南陽館」左側には演芸の「大阪花月劇場」があった。

新金比羅宮の向い、いまの「NGKシアター」は広場であった。正月はサーカスがやってきたし、夏にはお化け屋敷が建った。

この広場の東南角付近に貯水池がつくられたのは、本土空襲が予想された昭和19年頃だった。学校への行き帰りに貯水池建設の作業を見ていたから、粘土で固めてゆく行程をよく覚えている。

ノリ面が傾斜していて、出来上がった子供たちが落ちたら危険だという恐怖心があった。

新金比羅宮の北は「弥生座」（昭和17～南宝劇場と改称、同20空襲で焼失）、弥生座と南陽館は裏でつながっていた。

後年、ワッハ上方で運営懇話会の会議のあと窓から下を眺めた時、L字型になった屋根のつながりがよくわかり驚いたことがある。

千日前を北へ南海通りを越すと右に「大劇（大阪劇場）」「ニュース館」「常盤座」がつづき、向かいには「敷島劇場」があった。

溝ノ側を越すと左は「大阪歌舞伎座」、右に「アシベ小劇場」「あしべ劇場」があってその北に千日前通りが横たわる。

これらの劇場で「レビュー」「漫才」「軽演劇」「映画」「芝居」などを観て多くの思い出を重ねたが、この繁華な町もセピア色の彼方になった。

明治3年（1870）千日刑場が廃止され、上方落語「らくだ」でも知られる火葬場、千日墓地が、天王寺斎場、飛田斎場に移転された。

そして千日墓地のあとに残った不毛の地を、奥田辨次郎、横井勘市、逢坂彌、藤原重助らが、千日前という花園につくり上げた。

これらの人々と、わたしの祖父成瀬駒吉はかかわりがあった。

大正7年（1918）10月、大阪府が「方面委員制度」を発足させた。

その第一回大阪府大阪市南区方面委員に、祖父は委嘱を受けている。

当時、祖父は日本橋三丁目で「旅人宿むかでや」を開業しており「宿屋業・衛生組合理事」の肩書があった。

方面委員は、主に都市中間層の者が選ばれる無給の名誉職で、管内の社会調査、生活困窮者の保護指導、社会施設との連絡にあたる役割を負った。

「名誉や利益を目的とせず、骨身を惜しまず世のために働く人」「受け持ち区域から病気で薬を得られぬ人や飢えて食べられない人を出さない責任感をもつ人」など厳しい資格も要った。

祖父が受持った「難波第一方面」は、北は千日前通り、東は堺筋の一本西の筋（住吉街道）、西は南海線、一部大阪球場前（当時、球場はない）、南は日本橋四丁目付近を東西に結ぶエリアだった。

当然千日前の盛り場はすべて入る。

こんな祖父と、千日前を拓いた人たちとののかかわりは当然のことだ。

平成8年（1996）4月から約1年半、わたしは朝日新聞の大阪版に「なにわ難波のかやくめし」を連載し、その中に祖父とこの人たちとの出会いのことなどを詳しく書き、2年後、東方出版から同名本として上梓した。

祖父は昭和11年9月に逝き、同年1月に生まれたわたしを抱いて後を託したのだろうか、わたしの心の中には「千日前」という灯がいつも輝いている。

平成8年（1996）11月15日、大阪府立上方演芸資料館が、わたしゆかりの千日前YES・NAMBAビル内に開館した。

その数年前、建築設計以前の段階で、吹き抜けロビーホールに殿堂入りする上方芸人の記念になるものを作りたいがと、館にかかわる人からアイデアの要請があった。

わたしの頭にひらめいたのは、三人奴の「松葉づくし」だった。

ロビーホールの壁面に、常緑の松に見立てた扇子を組んでゆき、その扇子に殿堂入りした人の名前を毎年書き加えてゆくという案だったが、ロビーもホールも出来なかったため、このアイデアは実らなかった。

いよいよ開館前になって、初代館長になった粕林利男さんから「殿堂入りした演芸人の似顔絵を描いてほしい」というオファーがきた。

粕林さんとは、彼が朝日放送時代に出逢っている。

江戸期の浮世絵師・東洲斎写楽を模戯した「見立て写楽 当世東西名物男」と題した個展を大阪・東京で開いて「似顔絵の成瀬」と称せられた年の昭和49年（1974）のことだ。

この年、彼のプロデュースした「米朝ファミリー和朗亭」の番組に携ったのがきっかけで、番組宣伝用の「司会者花かるた」と名した花札を任天堂で製作した。

一月の鶴は笑福亭仁鶴、二月のうぐいすはキダ・タロー、以下ミヤコ蝶々、上岡龍太郎、横山やすし・西川きよし、桂三枝、浜村淳、京唄子・鳳啓介、桂米朝、藤本義一、西条凡児らを絵札に描き込んだ珍品で大いに評判を呼んだ。

これら「司会者花かるた」は、後に拡大コピーされワッハの居酒屋「こいさん」に飾られた。

その他にも、開館時の各所には注文を受けて描いた芸人の絵が展示され、出口そばの売店では第1回殿堂入りの芸人を描いた「絵はがき」も販売された。

第1回目の殿堂入りで描いたのは「初代桂春團治」「五代目笑福亭松鶴」「横山エンタツ・花菱アチャコ」「砂川捨丸・中村春代」「三代目吉田奈良丸」「二代目旭堂南陵」の6点8人。

以後、今回の第21回目「かしまし娘」まで54点85人の芸人を描いてきた。

当初は、この絵をもとにして作られた操り人形で、その芸人の所作などを模した小劇を館内で演じていたが、いまは人形も作られなくなった。

往時のワッハ上方では、4階「上方演芸の殿堂ギャラリー」にてこの絵と操り人形が展示されていたし、上方演芸の歴史を紹介する展示品陳列や、小演芸場「上方亭」（50人収容）、5階の「ワッハホール」（300人収容）、7階の「レッスンルーム」などもあったが、平成25年（2013）3月、規模縮小のため閉鎖され、現在は7階に「演芸ライブラリー」を残すのみになっている。

そんな中、今年2月、「ワッハ上方がリニューアルする方針」と毎日新聞が報じた。

約6万点を越す資料の常設展示スペースの復活や、芸人によるミニライブができる舞台の新設などのリニューアルを約1年かけて行う予定とあるが、笑都大阪の博物館としての再生が世界に誇れるものになることを祈っている。

わたしはこれまで狛利男、井上宏、有川寛、伊東雄三ら歴代館長のもとで運営懇話会委員を18年間務めてきた。

その設置の要因は「大阪府立上方演芸資料館」の円滑な運営を行うためのもので、資料館が行う上方演芸の保存・新興に資する資料に関し意見を述べたり、「上方演芸の殿堂入り」にふさわしい演芸人の選考を行い、大阪府知事に推薦したりすることなどが所掌事務である。任期は2年で15人以内を知事が委嘱するのだが、上方演芸に関する前職経験がある者の中から選ばれることになっている。

平成22年（2010）8月23日、東西落語家で初の文化勲章を受けた人間国宝・三代目桂米朝さんの第14回上方演芸の殿堂入り表彰式があった。

この晴れの日、わたしは大阪歴史博物館からいただいた、74年ぶりにようやく会えた祖父の写真を胸にして、孫二人と千日前を歩いた。

「おじいさん、どうですか、あなたの時代の千日前とはずい分変わったでしょう」と心の会話をしながら、孫たちにも私との思い出をもたせようと考えて歩いた。

米朝さんは車椅子だったが、米團治さん司会の座談会では、小佐田定雄さんと私を相手に楽しく喋っておられた。

当初、運営懇話会委員として殿堂入りの芸人を選考していた、桂米朝、夢路いとし、喜味こいし、露の五郎さんらを始め、初代館長狛利男さんも逝去されている。

移転存亡の危機をのり越え「ワッハ上方」は小さいながら生きている。

「夫婦善哉」でよく知られる大阪の作家・織田作之助は、ミナミ、それも千日前をこよなく愛していた。この地域を題材にした作品も多い。

昭和二十年三月十四日未明、大阪大空襲により一夜にして消滅したこの町の人々に十日後会い、その逞しさを「起ち上る大阪一戦災余話」や「神経」、「文楽の人」などで賞讃している。

「散っても散っても季節が来れば咲くという文化の花の命永さに、今年の春をはじめて感ずる思いを抱いたことであろう……」と。

どっこいミナミは生きている。

NHK朝ドラ「わろてんか」の主人公ではないが「笑ろてますか」。

泣く間があったら「笑わんかいな」。

織田作之助と同時代、ミナミ千日前の空気を共有していた私は、祖父から受けた千日前の歴史のなかにいる。

大阪府立上方演芸資料館運営状況（平成 29 年度）

■ 上方演芸資料館（ワッハ上方）入館者数実績〔月別推移〕

月	営業日数	男 性			女 性			計	リクエスト件数
		大 人	中高生	小学生以下	大 人	中高生	小学生以下		
4月	22	816	10	14	299	3	11	1,153	658
5月	22	813	4	22	349	6	13	1,207	617
6月	21	697	53	11	301	57	12	1,131	608
7月	23	837	10	18	368	8	19	1,260	632
8月	21	956	17	48	479	17	51	1,568	608
9月	21	716	1	9	395	6	4	1,131	510
10月	23	756	9	11	386	1	20	1,183	562
11月	20	743	0	8	386	2	10	1,149	564
12月	20	694	0	10	313	6	15	1,038	556
1月	20	657	2	17	250	2	8	936	510
2月	20	720	4	8	327	5	10	1074	567
3月	22	765	25	22	414	12	28	1,266	704
計	255	9,170	135	198	4,267	125	201	14,096	7,096
H27	257	13,105	283	291	5,313	351	223	19,566	9,520
H28	255	10,123	119	252	4,079	121	194	14,888	8,122

《参考：1日平均入館者数》

H27年度	76.1人
H28年度	58.4人
H29年度	55.3人

■ 映像音声資料視聴上位 10 点

タイトル
蔵出し名作吉本新喜劇 花紀京 岡八郎 泥棒と鈴／恋の売上税
サンドウィッチマンライブ 2007
永久保存版 吉本新喜劇ギャグ 100 連発5 横丁へよ～こちょ！編
20 世紀名人伝説 爆笑!! やすしきよし漫才大全集 ①
てなもんや三度笠 爆笑傑作集 1
M-1 グランプリ 2010 Disc. 1
蔵出し名作吉本新喜劇 花紀京 岡八郎 スリ貴族／究極の結婚式
讀賣テレビ開局 45 周年記念 平成紅梅亭特選落語会 特選噺家の会
讀賣テレビ開局 45 周年記念 平成紅梅亭特選落語会 饗宴！夢の前夜祭
よしもと栄光の 80 年代漫才第 1 巻（横山やすし・西川きよし）

■ 運営懇話会開催実績

平成 29 年度は、計 2 回を開催 (12 月 14 日 (木)、1 月 25 日 (木))

■ 資料活用検討委員会開催実績

平成 29 年度は、計 2 回を開催 (9 月 21 日 (木)、2 月 28 日 (水))

■ 資料整理部会開催実績

平成 29 年度は、計 23 回を開催

■ 研修会実施報告

資料整理部会の荻田部会長の提案により、本年度第 5 回部会から、部会出席者で研修会を実施。

毎回テーマに沿って、荻田部会長、大西委員所蔵の CD 等を視聴しながら、両先生から講義を受けた。

<実績>

部 会	開 催 日	研 修 内 容
第 5 回	6 月 13 日 (火)	「国勢調査とレコード」について *エンタツ・アチャコ
第 6 回	6 月 27 日 (火)	「語り芸の世界」について
第 7 回	7 月 11 日 (火)	「浪花節 名優中村鴈次郎」について * 初代中村鴈次郎 三代目吉田奈良丸
第 8 回	7 月 25 日 (火)	三代目奈良丸の「勸進帳」について
第 9 回	8 月 8 日 (火)	「SPレコード蓄音機の操作方法」について
第 10 回	8 月 22 日 (火)	「萬歳から漫才へ」について *ウグイス・チャップリン
第 11 回	9 月 12 日 (火)	「絵口合の楽しさ」について
第 12 回	9 月 26 日 (火)	「岡本玉治」について
第 13 回	10 月 10 日 (火)	近代漫才の祖 「玉子屋円辰」について
第 15 回	11 月 14 日 (火)	「三曲萬歳」について *砂川捨丸
第 16 回	11 月 28 日 (火)	「大和萬歳」について
第 17 回	12 月 12 日 (火)	「阿保陀羅經」について
第 18 回	1 月 9 日 (火)	「天龍決意を語る」について

■ 館外展示開催実績

○目的：大阪が誇る上方演芸の過去から現代までの移り変わりと、その時代に活躍した演者にまつわる資料を展示し、府民に上方演芸に親んでもらう機会を提供するとともに、ワッハ上方のPRを図った。



○場所：府内3ヶ所（大阪市内 [キタ・ナンバ]、東大阪市）

場 所	開催時期等	会場風景
<p>よしもと漫才劇場 YES・NAMBAビル *5階EV前ホール (大阪市中心区)</p>	<p>【開催時期】 ・10月21日(土)～29日(日) [9日間]</p> <p>【見学者数】 ・ホール来館者数 6,989人</p> <p>【タイトル】 ・「萬歳から漫才へ」</p>	  
<p>大阪工業大学 梅田キャンパス 「OIT 梅田7-」 *1階ギャラリー (大阪市中心区)</p>	<p>【開催時期】 ・11月15日(水)～30日(木) [16日間]</p> <p>【見学者数】 ・来館者数 12,197人</p> <p>【タイトル】 ・「萬歳から漫才へ」</p> <p>【アンケート結果】 ・満足度 75.9%</p>	   
<p>大阪府立 中央図書館 *1階展示コーナー A・B (東大阪市)</p>	<p>【開催時期】 ・1月30日(火)～2月25日(日) [27日間]</p> <p>【タイトル】 ・「わろてんか」の時代の上方演芸 ～萬歳から漫才へ～</p> <p>【見学者数】 ・来館者数 44,801人</p> <p>【アンケート結果】 ・満足度 88.2%</p> <p>[参考：展示期間中の講演会] 主 催：府立中央図書館 日 時：2月18日(土) 講 師：荻田 清 テーマ：「『わろてんか』に出てきた芸能」 …二〇加、まんざい、あほだら経 など…</p>	   

■ 演芸ライブラリー（紹介）

	開催期間	テーマ・紹介資料	展示風景
第14回	4/1~4/30	<p>●錦影絵</p> <p>（映像）『とっておき米朝噺し 第22回錦影絵』 『芸能わらいえて第13回』 『YTV サロン 上方寄席・西の旅』</p> <p>（音声）『ドキュメント 日本の放浪芸』</p> <p>（書籍）『ものがたり 芸能と社会』 『桂米朝集成 第三巻』 『上方12号（復刻）』他</p>	
第15回	5/1~6/30	<p>●京唄子</p> <p>（映像）『てなもんや三度笠爆笑傑作集1』 『松竹名人会 第一集』 『唄子・啓助のごめんやす』 『今年はこうなる！ '84 爆笑大予言』他</p> <p>（音声）『第二回上方漫才大賞記念 演芸大会』 『澤田隆治が選んだ 爆笑！漫才傑作選（4）』</p> <p>（書籍）『花も嵐も踏み越えて』 『人生は回り舞台 私の“堀の中”物語』</p>	
第16回	6/1~6/30	<p>●柳家三亀坊</p> <p>（映像）『和朗亭 八 おーるど寄席』 『気がつけば紙芝居～柳家三亀坊伝説～』 『柳家三亀松 粋・艶 都々逸』他</p> <p>（書籍）『惜別 お笑い人』 『桂米朝集成 第一巻～第三巻』 『米朝よもやま噺』 『上方芸能137号』他</p>	
第17回	7/1~7/31	<p>●音曲漫才（音楽ショウ）</p> <p>（映像）『松竹名人会 第二集』 『とんぼり寄席』 『漫才笑学校2 いとし・こいし漫才編年史』 『第9回上方お笑い大賞』他</p> <p>（書籍）『泣いて笑ってちりとてちん』 『上方芸能35号』他</p>	
第18回	8/1~8/31	<p>●落語家の踊り</p> <p>（映像）『初代桂南天師のずぼら』 『三代桂春団治師の五段返し』 『四代林家染丸師の桃太郎』他</p> <p>（書籍）『鹿のかげ筆』 『二代目さん』 『桂春団治 はなしの世界』 『米朝よもやま噺』 『米朝よもやま噺 藝 これ一生』他</p>	

	開催期間	テーマ・紹介資料	展示風景
第19回	9/1~9/30	<p>●上方喜劇、大集合</p> <p>(映像) 『藤山寛美十八番箱 六／笑艶 桂春団治 (第一部~第三部)』 『花紀京 岡八郎 蔵出し名作吉本新喜劇 / 泥棒と鈴 恋の売上税』 他</p> <p>(書籍) 『上方喜劇 鶴家団十郎から藤山寛美まで』 『喜劇百年記念誌 喜劇百年 曾我廼家劇から松竹新喜劇』 『上方放送お笑い史』 他</p>	
第20回	10/1~10/31	<p>●三曲万歳 (あいならえ)</p> <p>(映像) 『芸能わらいえて第12回』 『和朗亭第54回』 『上方漫才今昔大絵巻』 『第2回昔の笑い・今の笑い』 他</p> <p>(書籍) 『上方演芸辞典』 『寄席楽屋事典』 『ものがたり 芸能と社会』 『上方演芸大全』 他</p>	
第21回	11/1~11/30	<p>●新作落語</p> <p>(映像) 『とっておき米朝噺し 36 除夜の雪』 『平成紅梅亭 第8回』 『桂枝雀落語大全第十八集茶漬けえんま / 幽霊の辻』 『特選!! 落語全集第48回』 他</p> <p>(書籍) 『上方はなし (下)』 『上方芸能』 『米朝落語全集増補改訂版第四巻さ〜た』 他</p>	
第22回	12/1~12/26	<p>●浪曲のケレンネタとケレン読み</p> <p>(映像) 三代目吉川秋水 『水戸黄門漫遊記江戸の巻』 他 三代広沢駒蔵 『左甚五郎 千人坊主 (前半)』 他</p> <p>(音声) 初代日吉川秋斎 『木津の勘助』 他</p> <p>(書籍) 『上方芸能』 『米朝よもやま噺 藝、これ一生』 『実録浪曲史』 他</p>	
第23回	2018年 1/5~1/31	<p>●平成元年 (1989年) のテレビ</p> <p>(映像) 『第10回 ABC お笑い新人グランプリ』 『第19回 NHK 上方漫才コンテスト』 『創作漫才春の陣 (1989.03.05)』 『とんぼり寄席 (1989.06.29)』 『おはよう浪曲 (1989.07.23)』 他</p> <p>(書籍) 『NHK 上方落語の会 あくびの稽古』 他 『こちら JOBK NHK 大阪放送七十年』 『上方芸能 100号』 他</p>	

	開催期間	テーマ・紹介資料	展示風景
第24回	2/1~2/28	<p>●阿呆陀羅經</p> <p>(映像) 『漫才笑学校 第2回』 『とっておき米朝噺し 第46回』 『古今東西!一芸名人博覧会』他</p> <p>(音声) 『アホダラ経』</p> <p>(書籍) 『口演 上方芸人誌』 『桂米朝集成 第二巻』 『上方落語のはなし』 『上方漫才黄金時代』他</p>	
第25回	3/1~3/31	<p>●廣澤瓢右衛門</p> <p>(映像) 『和朗亭 第36回』 『和朗亭 第72回』 『和朗亭 第81回』 『第8回 上方お笑い大賞』他</p> <p>(書籍) 『藝能東西創刊号から終刊号』 『上方芸能63号~73号』 『悪声伝 広沢瓢右衛門の不思議』 『東西浪曲大名鑑』他</p>	

	開催期間	テーマ
小展示	4/1~5/31	●新着図書紹介
小展示	7/1~3/31	●ミニコーナー RAKUGO in ENGLISH
小展示	7/28~9/30	●第9回なにわなんでも大阪検定
小展示	9/30~3/31	●吉本興業創設者吉本せい

上方演芸の殿堂入り

上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人さんがあまたおられます。大阪府立上方演芸資料館では、時代を代表する演芸人の方々の功績や魅力を後世に伝えたいと考えています。

「上方演芸の殿堂入り」とは…

上方演芸資料館では、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛し親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」名人を決定しています。これまでに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど 54 組 85 名の方々が受章されています。

また、第 21 回目を迎えた平成 29 年度は、かしまし娘さんが受章されました。



かしまし娘

(画) イラストレーター成瀬國晴氏



第 21 回上方演芸の殿堂入り表彰式典にて
平成 30 年 3 月 29 日大阪府公館

「上方演芸の殿堂入り」演者一覧表

第1回(平成8年度)	初代桂春団治、五代目笑福亭松鶴、横山エンタツ・花菱アチャコ、砂川捨丸・中村春代、二代目旭堂南陵、三代目吉田奈良丸
第2回(平成9年度)	ミスワカナ・玉松一郎、中田ダイマル・中田ラケット、花月亭九里丸
第3回(平成10年度)	六代目笑福亭松鶴、芦乃家雁玉・林田十郎、梅中軒鶯童
第4回(平成11年度)	二代目桂春団治、松葉家奴・二代目松葉家喜久奴、初代京山幸枝若
第5回(平成12年度)	四代目桂米団治、松鶴家光晴・浮世亭夢若、西条凡児
第6回(平成13年度)	二代目桂枝雀、浪花家市松・浪花家芳子、富士月子
第7回(平成14年度)	橘ノ円都、桜川末子・二代目松鶴家千代八、吾妻ひな子
第8回(平成15年度)	都家文雄・都家静代、林家とみ
第9回(平成16年度)	夢路いとし・喜味こいし、横山やすし・西川きよし
第10回(平成17年度)	三代目林家染丸、五代目桂文枝、海原お浜・海原小浜、宮川左近ショー
第11回(平成18年度)	ミヤコ蝶々・南都雄二、人生幸朗・生恵幸子、三代目旭堂南陵
第12回(平成19年度)	ミスワカサ・島ひろし、島田洋之介・今喜多代、京唄子・鳳啓助
第13回(平成20年度)	横山ホットブラザーズ、暁伸・ミスハワイ
第14回(平成22年度)	三代目桂米朝
第15回(平成23年度)	二代目露の五郎兵衛、若井はんじ・若井けんじ
第16回(平成24年度)	上方柳次・上方柳太、岡八朗(コメディアン)
第17回(平成25年度)	川上のぼる、木川かえる
第18回(平成26年度)	二代目平和ラッパ、タイヘイトリオ(タイハイ洋児・タイハイ夢路・タイハイ糸路)
第19回(平成27年度)	秋田AスケBスケ、花紀京(コメディアン)
第20回(平成28年度)	三代目桂春団治、二代目春野百合子
第21回(平成29年度)	かしまし娘

※ 平成8年～平成29年度／54組85名

新しく開架した資料一覧

(タイトル 50 音順)

秋田寛 笑いの変遷	藤田富美恵 著
ありがとう、わが師春団治 福団治覚え書き	桂福団治 著
一升樹の度量	池波正太郎 著
江戸前の釣り	三遊亭金馬 著
NHKドラマガイド連続テレビ小説わろてんか Part 1	
NHKドラマガイド連続テレビ小説わろてんか Part 2	
エンタツアチャコのぼくらは探偵	上田賢一 著
大阪<映画>事始め	武部好伸 著
上岡龍太郎話芸一代	戸田学 著
上方芸能今昔がたり 昭和の舞台覚え書き	山田庄一 著
上方落語考究 笑いの世界、咄と噺のはなし	保志学 著
上方落語史観	高島幸次 著
上方落語の戦後史	戸田学 著
上方落語<東の旅>通し口演 伊勢参宮神賑	桂文我 著
機嫌よく暮らす 桂子師匠90歳、元気の秘密	内海桂子 著
喜六と清八 大笑いお伊勢参り	桂文我 著
桂子八十歳の腹づつみ	内海桂子 著
芸人という生きもの	吉川潮 著
小雁の京都人の取扱説明書	芦屋小雁 著
雑誌『ユリイカ』第47巻第8号、「特集：桂米朝」	
師匠！	内海桂子 著
時代とフザケた男 エノケンからAKB48までを笑わせ続ける喜劇人	小松政夫 著
シネマで夢を見てたいねん	芦屋小雁 著
芝居小屋と寄席の近代—「遊芸」から「文化」へ	倉田喜弘 著
しゃれことば事典	相羽秋夫 著
笑劇の人生	芦屋小雁 著
正蔵一代	林家正蔵 著
笑福亭晃瓶の京都ほのぼの暮らし	笑福亭晃瓶 著
昭和と師弟愛 植木等と歩いた43年	小松政夫 著
スター万華鏡 昭和の風に吹かれて	なべおさみ 著
素晴らしき未完成品 芦屋小雁77歳	芦屋小雁 著
絶滅危惧職、講談師を生きる	神田松之丞 著
曾根崎艶話	小林一三 著

高田文夫の大衆芸能図鑑	高田文夫 著
蝶々にエノケン 私が出会った巨星たち	中山千夏 著
徳川夢声のあかるみ十五年	徳川夢声 著
徳川夢声の小説と漫談これ一冊で	徳川夢声 著
浪花節 流動する語り芸 演者と聴衆の近代	真鍋昌賢 著
八代目正蔵戦中日記	林家正蔵 著
噺家根問 雷門小福と桂小文吾	瀧口雅仁 著
花も嵐も、講釈師が語ります。	神田香織 著
火花	又吉直樹 著
病室の<シャボン玉ホリデー> ハナ肇と過ごした最期の29日間	なべおさみ 著
編集長のポロ靴 雑誌<上方芸能>の16年	木津川計 著
<みそか寄席>三百回達成 足かけ二十五年の軌跡	桂文我 著
吉本興業百五年史	
吉本せい—お笑い帝国を築いた女	青山誠 著
吉本せいと林正之助 愛と勇気の言葉	坂本優二 著
浪曲定席木馬亭よ、永遠なれ。 芸豪烈伝+浪曲日記	長田衛 著
浪曲の神髄 日本人の魂の叫びが聞こえる	芦川淳平 著
ロッパ食談 完全版	古川緑波 著
ロッパ随筆 苦笑風呂	古川緑波 著
ロッパ日記代わり 手当たり次第	古川緑波 著
話術 (新装版)	徳川夢声 著
私だけが知っている金言・笑言・名言録	高田文夫 著
<わろてんか>を商いにした街 大阪	廣田誠 著

『壹生宝』について

——曾我廼家五郎の歌舞伎役者時代の資料——

荻田 清

(資料整理部会長)

(梅花女子大学名誉教授)

本館所蔵の高須文七文庫たかすぶんしちのなかには、古い貴重な文献が多い。中でも筆者が特に注目したのは、曾我廼家五郎そがのやごろう(以下五郎と略す)が、中村珊瑚郎なかむらさんごろうの弟子時代に書き留めたと思われる書冊についてである。今回はそのうちの一つ、『壹生宝』を簡略に紹介しておきたい。

(本文中、僭越ながら敬称略)。

五郎が歌舞伎役者から出発したことはよく知られている。その師匠は明治大阪の名優・中村宗十郎なかむらそうじゆうろうの弟子、中村珊瑚郎だった。明治10年(1877)9月6日生まれの五郎17才(以下数え年)の明治26年に、「弁護士を思ひ切つて役者」(注1)の世界に飛び込んだ。五郎の事績の研究は、鍛冶明彦「曾我廼家喜劇その成立の軌跡」(『歌舞伎 研究と批評』42号、2009年4月)がたいへん詳しい。この論考は資料に基づいて、従来の説を検証し、訂正した。五郎には『曾我廼家五郎自伝 喜劇一代男』(注2、以下『自伝』と略す)、「僕の四十年」(注3)という自伝風の文章があり、どうしてもそこに頼ってしまう。自伝ゆえの思い込みや記憶違いを正そうとしたのが鍛冶論文といえる。日露戦争の新聞号外を無筆の人が読んで騒動を起こす「無筆の号外」の初演が、明治37年2月浪花座ではなく、5月神戸の朝日座だということを、各地の新聞記事などをもとに明らかにもされた。このあと鍛冶は同誌43号から57号まで15回にわたり、「曾我廼家喜劇上演記録」も発表している。

五郎の歌舞伎役者時代のことも、「曾我廼家喜劇その成立の軌跡」は、歌舞伎資料を博搜して、詳しくおさえている。「珊之助」の名は、五郎の前にすでに資料に出てくるということも指摘された。筆者も歌舞伎見立番付の明治26年のもの(注4)に、中村珊之助を見出したが、五郎の珊之助か別人かは微妙である。

三田純市著『道頓堀』(白川書院、1975年)の「喜劇誕生」の章に、喉頭ガンで声を失った五郎との筆談記事(昭和23年7月17日大阪新聞)が出ている。その一部に

——延若さんとの関係は——

五郎文(忙しい筆談に老眼鏡外したり掛けたり)ボク達の二十の頃、京都道場の芝居(註・現松竹座)ボクは珊瑚郎の弟子のカブキ下廻り珊之助といった。若手売り出しの延二郎時代の延若さんの座員になる。ボクの芸の師匠なり、恩人なり

とあり、五郎は二代目実川延若じつかわえんじゃくとの関係を強調している。鍛冶論文でも『近代歌舞伎年表 京都篇』から、明治29年4月南座若手歌舞伎実川延二郎えんじろう一座に珊之助の名を確認している。五郎の芝居の基本は歌舞伎にあったとみて間違いないと思うが、その見方を補強する資料として、『壹生宝』を紹介しておきたい。

まずは本の体裁、表紙から説明する。

【体裁】和装本。半紙本、袋綴じ、紙縫綴じこより。

【表紙】厚紙、白。

【用紙】薄手半紙、罫線入、12行。

【丁数】140丁（280頁）

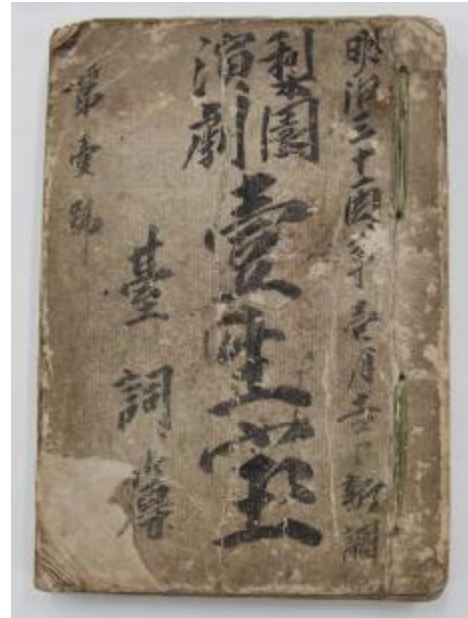
〔表紙〕

明治三十酉年壹月吉日新調

梨園/演劇 壹生宝

台詞簿

第壹号



『壹生宝』表紙

題の「壹生宝」は、一生の宝物という意味であろう。「台詞簿」というのは、歌舞伎の役ごとにセリフを抜き書きした「書き抜き」を集めたもの。明治30年1月から新たに描き始めたのか、書き溜めたものを清書してまとめたものかはわからない。「第壹号」とあるからは、書き継いでいく予定だったとわかる。表紙の裏は文字がなく、扉に当たる頁には「中村珊瑚ママ 朗ママ 問人 中村珊之助 印〔和田〕」と、一字一字文字色を変え装飾的に記している。「和田」は本名の丸印。その裏には「さがり小」の文字が一行目にあるのみで、意味不明。

次の丁の表（頁でいえば、3頁）から、目次が続く。

目出度はじめ

一	雨夜伽累物語	若徒惣助
二	雨夜伽累物語	こし元御露
三	雨夜伽累物語	女房御菊
四	腕試覚剣法	悴甚之助
五	腕試覚剣法	紅裏甚三
六	雷御新朝日梅雨清	丁児徳松
七	雷御新旭梅雨清	高橋民二郎
八	苺萱桑門築紫轆	女之助
九	苺萱桑門築紫轆	女房橋立
十	苺萱桑門築紫轆	夕しで

十一	苜萱桑門築紫轆	堅物太朗
十二	姫鏡二々 葉絵草紙	奴三千助
十三	苜萱桑門築紫轆	御台所御牧之方
十四	稻妻双紙 大序 三ツ目	佐々良三八
十五	大蔵卿都双紙 桧垣御殿	一条大蔵長成公
十六	白井権八 宿屋場	奴定助
十七	兜軍記 阿古屋琴責	庄司重忠
十八	源平布引之滝 舟場 九郎助内	齊藤実盛
十九	檜山実記 三人割台詞	相馬大作 御さき 刃ヤ太吉
二十	天網島 ^[ママ] 川正之場	粉屋孫右衛門
廿一	一ノ谷兜 軍記 あばらや	菊之前
廿二	一ノ谷兜軍記 須磨浦	熊谷小次郎直家
廿三	一ノ谷兜軍記 須磨浦	無官太夫敦盛公
廿四	一ノ谷兜軍記 熊谷陣屋	堤 軍次
廿五	うす雪 ^[ママ] 御てん 清水 せんぎ	筋書 園部左衛門
廿六	薄雲 清水之場	頼国年
廿七	大蔵卿都双紙 桧垣御殿	妻鳴瀬
廿八	義経千本桜 しいの木	主馬小金吾成里
廿九	義経千本桜 すしや	娘お里
三十	^[ママ] 管 原伝授 賀之祝	女房八重
卅一	同 手ら子や	女房戸浪
卅二	金毘羅 志渡寺	妻すが之や
三十三	腰越状 五斗目貫	妻 高之谷
三十四	本朝二十四孝 桔梗原 三だんめ	妻唐織
三十五	(朱筆)本朝二十四孝 桔梗原	妻入江
三十六	(朱筆)御所桜 堀川 弁慶夜	妻花之井
三十七	近江源氏先陣館 八ツ目	妻早瀬
三十八	蘭蝶此糸 若木屋	奴逸平
三十九	全	やりての御かん
四十一	艶競石川染 妾宅	妾御滝
四十二	三人新兵衛 男達恋達引	姉葉まじ
四十	蘭蝶此糸 若木屋	奴宅内



『壹生宝』目次と日記部分（頁でいえば、6頁、7頁）

ここに挙げられている演目をみれば、一部明治の新作も含まれてはいるが(注5)、時代物(丸本物)を中心とした歌舞伎の旧作である。著名な作品の役名を見れば、立役・女方とも主役・準主役級の役名も見られる。この頃のことを「僕の四十年」には次のようにある(ふり仮名は省略)。

二十一歳 徴兵適齢で堺へ帰つて検査をうけた 勿論親族一同へは秘密である、乙種補充兵だと聞いて再び旅役者となつて、但馬播州辺の掛小屋芝居を廻つて居た

二十二歳 中国辺の田舎を廻つて日を送つた 此一座は有名な播州座といつて、一種かわつた役者のみで時代もの専門で、五里徒歩しては一日開演し、十里草鞋がけで行つては 藁小屋で一夜演るといふ有様で 実に面白い風習である、機を見て此芝居の内容をかいて見たいと思ふ、此年も暮れた

目次に出ている歌舞伎の外題をみれば、この播州座のことに符合してくる。この頃のことを『自伝』では、播州加古川の寿座を本拠とした嵐吉三郎座(大芝居の岡島屋とは別人)とし(注6)、「義太夫を重んじて、相当皮肉な院本物でも、大序から大切りまで通し狂言で演じていた」という。その一座で「重宝がられて、過分な優遇も受け」「この安穩な生活に甘んじていたら、一生旅役者として」終わっていたかもしれないという。まさにこのことを証明している資料といえよう。

そして、目次のあとに1丁(2頁)分、日記が含まれている。固有名詞を含めて難読箇所が多いが翻刻してみる。判読できなかった文字を■で示した。誤読などご教示ください。

五月十五日 此雨天ニテ芝居休業 此日今市ヨリ杵築神社へ参ル 此日御かあ ばゞ 松江へ帰宅スル

十六日 狂言前ト同ジ

十七日 此日広島県安芸郡呉港和庄町ヒガキ座まへ 湖二郎 利三郎方 嵐寛之助ト 広島市稲荷町百二十三番地 中村斫幸ト 全天満町西ノハナ 吉田甚助内中村すえ蔵ト 三軒之所がきヲ聞ク 此後大ゴテ/\ニテ スグ松江へ帰ル

翌十八日 無事

十九日 此日豊丸頭取ニテ鳥取行の話定めまる^{〔ママ〕}

翌廿日 珊若諸共ニ豊丸立タス 此日御かゞ ばゞへ ちゞみのきものとしゆつばんを買て貰ふ

廿一日 此日島根徳市方ニテ高田ノ件ニつきエライゴテ/\ 此夜堺ヨリ電報クル〔アスケンサ スグカイレ〕 之レにて大きに驚き スグ局待電報ヲ堺市役所へ発信ス

翌廿二日 市役所より〔キタル十八ニチ〕トシテ返信ス 之レにて堺宅へ手紙ヲ出ス 此夜津田街道三町目鈴々子方ノ使トシテ 清水信子金三円もつてくる 此夜信子ハ色ニナル

翌廿三日 右之金にてめのふの土産品ヲ■リアル

(裏は、上の数字だけで、日記の文字無し)

(丁がかわって)

小三ヲスル 切り はんがくにて斎姫ニテ 替狂言 前 御半長ニテ長吉ト 切 はんがく前は同じ

廿九日 卅日 両日は 前 小袖よめいり まちがいニテ 中 五斗ニテ 切 吉田やニテヤクハ娘御玉ト真之介とヲスル 又切ニテたいこ持ヲスル 廿九日のばんに津田街道のつわれ人より 花一円もろう

五月一日 又松蔵より祝義代五十銭ト一円トヲうけとる

五月二日 前 廿四孝ニテ妻唐織 切 御所桜ニテ花ノ井ト 切 近江八景ニテ こいなみヲスル 此日入かけ 此ばんヨリ 御とも■■と

三日四日ノ朝まで雨天ニテ芝居の休ミゆへいつゞけ 此日かへりしところ えらいゴテ/\ 此ばん 津田街道三丁め 石すが子より金一円もろう事アル

翌五日 芝居スル 矢張前の狂言也

六日ノ日 前かるかや 切 同じかるかやにて 女の助をスル

七日の日 雨天にてヤスミ

八日ノ日より 忠臣蔵ニテ御かるト石堂ヲスル

九日ノ日ニ 松蔵より今市行の芝居二日分もろうてくる 此日ゆうけいに今市へつき 芝居小家まへ八百徳ニヤドヲトリ 諸所へ手紙ダス

翌十一日 雨天ニテ休業

十二日 此日今市町中ヲ町まわりして すぐ初日 狂言 式三番ト先代はぎにて 中ノ太夫トヨリ兼ヲスル 此日サトヨリ手紙クル

十三日 狂言 前管原 切 はんがくにて 八重と戸浪トヲスル 此日 トモ テツ 吉岡ヨリ手紙クル

十四日 狂言 前 大蔵 中 千両のぼり 切 重之井ニテ 御定ト鳴瀬ト北野ヤモ平ヲスル

今市の地名は山陰道・山陽道にもあり、杵築神社は広島三次の神社かと思われ、松江・広島・呉などの地名もあり、場所を特定できないでいるが、中国辺を渡り歩いてきた時代のものといえよう。また、徴兵検査の件が出てくることから、明治37年4月28日から5月14日までの日記だとわかる。この時期、五郎は忙しく小さな小屋をまわりつつ、旅回りの一座で相応の役をあてがわれながら、歌舞伎の基本を身に着け、日記からは楽しく日々を送っていたように見える。

【注】

- 1 : 「僕の四十年」(『上方趣味』大正7年正月号)の17歳の項
- 2 : 上田芝有編『曾我廼家五郎自伝 喜劇一代男』(表紙題、昭和23年、大毎書房)。この本の題名は扉には「曾我廼家五郎述 喜劇一代男」、奥付では「喜劇一代男 曾我廼家五郎自伝」とあって、混乱しやすい。
- 3 : 「僕の四十年」(『上方趣味』大正7年正月号、大正7年春の巻)
- 4 : 明治26年1月「大日本俳優一覧」(大阪・西岡庄造版)の東方三段目
- 5 : 「あまよばなしかきねものがたり雨夜伽累物語」は明治17年5月京都北側芝居初演、累の怪談物。「うでだめしおぼえのわざもの腕試覚剣法」は明治18年7月角の芝居。腕の喜三郎の話。「檜山実記」は明治14年9月角の芝居。講談で有名な相馬大作の話。「雷御新朝日梅雨清」は、同題の作品を見つけていないが、毒婦雷お新を扱った「雷於新後日物語」が明治24年7月31日から弁天座で上演されている。番付の「語り」によれば、朝日新聞雑報をもとに脚色して大入りをとった作品の三年目の後日作品だという。お新以外はみな旧幕時代の話。
- 6 : 寺河俊人著『播州歌舞伎の主役たち』(昭和53年、日本放送出版協会)には、嵐小六(大芝居の吉田屋とは別人)の座の活躍を記した後に「大阪の砂川捨丸や曾我廼家五郎も一座に加わっていたという話もある。」と出てくる。

楽語荘発行のレコード

大西 秀紀

(資料整理部会委員)

(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員)

1 五代目松鶴と「楽語荘」活動

昭和に入り漫才人気が高まる一方で、落語は徐々に衰退の兆しが見えていた。すでに大阪の主要な寄席を掌中に収めていた吉本は、興行の上で漫才をより重要視するようになる。当時吉本には五代目笑福亭松鶴をはじめ、二代目桂三木助、二代目林家染丸、三代目三遊亭円馬といった大看板が在籍したが、劇場では漫才の売れっ子には重要なうしろの出番が与えられ、落語はベテラン勢でも三ッ目や四ッ目の浅い出番が当てられた。当然長講のネタなど出来る持ち時間もない。初代春團治亡きあと噺家の間には、いつしか落語の将来を悲観するような気分が漂い始めたという⁽¹⁾。

そんな状況に、このままでは上方落語は滅んでしまうという強い危機感を抱いた松鶴は、東成区片江町にあった自宅を「楽語荘」と名づけ若手育成の道場とし、同人を募り、昭和11年4月に私財を投じて、機関誌的な性格を持つ『上方はなし』を発刊(昭和15年10月の第49集を最後に、統制による紙不足で終刊)。翌12年には吉本を退社し、大阪、京都の「上方はなしを聴く会」をはじめ、工場慰問や学校での余興などの地道な活動を続けた⁽²⁾。

「楽語荘」の活動には松鶴以外に、三代目桂米團治や笑福亭松翁(四代目松鶴)を顧問格に、『上方はなし』の編集・執筆にも尽力した中濱静圃こと二代目桂米之助(後の四代目米團治)、桂花柳(後の三代目枝鶴)、二代目笑福亭福圓、笑福亭圓歌、二代目笑福亭福松などが参加した。米團治を除くといずれも当時第一線を離れていた噺家達だが、あらためてじっくりと落語が出来る場を得て、「上方はなしを聴く会」の楽屋は非常に活気があったという⁽³⁾。

松鶴は「楽語荘」の活動を続ける事を条件に、昭和18年5月に吉本に復帰するが、その後の空襲で大阪の街は焦土と化し、吉本の劇場も焼失した。しかし終戦後もすぐに二代目立花家花橘、文の家かしく(後の三代目福松)、橘ノ圓都、初代桂春輔、前記米之助、桂麦團治(後の四代目文團治)、四代目桂文枝らと「上方はなしを聴く会」を再開。昭和25年に亡くなるまで、「楽語荘」の活動は続けられた。その後半生は上方落語の保存と復興にささげられたといっても過言ではなく、現在の上落語は五代目松鶴抜きには語れないといえる⁽⁵⁾。

2 楽語荘発行のレコード

『上方はなし』には松鶴名義の落語速記が多数掲載されていて、それがこの雑誌の資料的価値を高めていることはいうまでもない。文字による大阪落語の記録だが、これがレコードなら、噺家の肉声でより正確に残すことができる。花橘や初代春團治と並んで、大正期より数多くのレコ

ードを吹込んだ松鶴にとって、楽語荘によるレコード制作にたどり着くのは、きわめて自然な流れだったといえよう。

□SP レコード「天王寺詣り」 五代目笑福亭松鶴 楽語荘発行（図 1）

ダイヤモンド 1023-1025（3枚6面、昭和13年制作カ）

「天王寺詣り」は笑福亭にとって大切な演目で、「楽語荘」発行を謳うレコードとしてこれが選ばれたことは、松鶴の心意気が窺えて興味深い。自分の不注意から愛犬を喪った男が、その供養のために知人の案内で、彼岸の参詣客で賑わう四天王寺へ引導鐘をついてもらいに行く。いわばそれだけの物語だが、四天王寺への道筋から、境内を見て回る間の建物や亀の池の説明、押し寿司の屋台や竹ゴマなどの物売り、あるいはのぞきやカラクリなどの見世物や物乞いなどの描写が長々と続く。それだけに聴き手をダレさせず、メリハリを付けながらサゲへ運ぶのは、非常に高いレベルの技術が要求される。松鶴は味わい深い語り口で、彼岸の天王寺詣りののどかな空気を描き出している。

『上方はなし』11号に五代目松鶴「天王寺詣り」の速記が掲載されていて、もちろん過不足はあるものの、レコードもほぼこの速記の通りに進行する。ただ松鶴の口調はこちらよりも、むしろ『郷土雑誌 上方』第3号に掲載された速記に近い。⁽⁷⁾ 六代目松鶴によると「この三代の御師匠さんが書いて残したもんが今大阪落語の文献になってるんですわ。うちの親父が「上方はなし」を書いてだしたのなんかみな三代目の書いたもんです」ということだが、この『上方はなし』の速記も三代目松鶴（竹山人）によるものかも知れない。⁽⁸⁾

楽語荘発行の落語レコードは、この「天王寺詣り」だけのようだが（他にダイヤモンドレーベルの寄席囃子のレコードもあるようだ）、⁽⁹⁾ 不思議なことに「上方はなし」には、このレコードあるいはレコード化に触れた記事や広告が見当たらない。唯一関わりのあるものといえば、『上方はなし 第33集』（昭和14年2月）に掲載された、ダイヤモンドレコード・日本録音株式会社の広告である（図2）。これには「笑福亭松鶴師が大阪落語趣味同好の方々へ頒布の為め吹込つゝあるダイヤモンドレコード」とあるが、この「吹込つゝある」という表現が何とも悩ましいところである。レコードを同人へ頒布するためには何らかの告知が必要だが、チラシを本誌に挟み込むなどの方法をとったのだろうか。

3 ダイヤモンドレコード

ダイヤモンドレコードは大阪市西成区姫松通3-22にあった、委託制作専門の日本録音株式会社のレーベルである。同社は大阪窯業セメント株式会社重役だった磯野小次郎が、昭和12年5月に設立した録音スタジオで、レコード盤の製造は東淀川区宮原町にあったコッカレコード株式会社が請け負っていた。⁽¹⁰⁾ 盤質は必ずしも良好ではなく、プレスが甘いため盤面に凹凸が見られたり、素材の脆さから割れやすい盤も時に見受けられる。

レコードが入る紙袋（スリーブ）には、「日本唯一の完備せる吹込装置／三分間毎にぶつ切りの面倒を要せず／無限長時間の吹込装置／出張の吹込も自由自在／日満独米仏特許出願済（／は改行）」と、長時間録音が可能で最新の設備であることを謳っている。具体的なことは不明だが、昭和10年頃にはすでにドイツでテープレコーダーが実用化・市販されていたようだから、⁽¹¹⁾ 同社が国

内大手に先駆けて導入した可能性は考えられる。もしそうなら、松鶴は我が国で最初にテープ録音を体験した噺家といえる。

ダイヤモンドレコードは一般の販売ルートに乗らない委託制作盤のため、総目録といったカタログは存在せず、その全貌は不明である。実物が確認されているものでは、襲名直後の四代目竹本織太夫（後の八代目綱太夫）と七代目竹沢団六（後の十代目弥七）コンビの「ひらかな盛衰記 逆櫓の段」や、菊原琴治の三味線組歌、中橋暁夢の箏組歌といった、大阪の著名な演奏家による録音があり、いずれも大変貴重なものである。

4 おわりに

当時はメーカーを問わず、落語のレコードは1枚か2枚組で発売されるのがほとんどであった。言い換えれば落語レコードは2枚組を超えると売れないという確信を、レコード業界は持っていたということだろう。そうなると長くても13~4分程度にはネタをまとめなければならない。松鶴の「天王寺詣り」のレコードは、光鶴時代の1枚（オリエン特 A1401/A1402⁽¹²⁾）と枝鶴時代の2枚組（コッカ 8242-8243⁽¹³⁾）がすでにあっただが、当然ながらいずれも部分的なものだった。必ずしも全編ではないが、この3枚組の「天王寺詣り」は、松鶴にとって満を持した録音だったといえよう。

ただ現在 SP レコードが流通する中古市場などで、このレコードを見かけることはまずない。実際の頒布数は意外に少なかったのではないだろうか。レコードの自主制作は「楽語荘」にとって、経済的に荷が重い企画だったかも知れないが、それだけにこの「天王寺詣り」が残されたことの意味は大きい。

（この「天王寺詣り」の音源は、当館ライブラリーにてお聴きいただけます。）



図1 「天王寺詣り」レーベル
(大阪府立上方演芸資料館蔵)



図2 ダイヤモンドレコードの広告
『上方はなし 第33集』(昭和14年2月)

【註】

- (1) 香川登志緒『大阪の笑芸人』、晶文社、昭和 52 (1977)、p. 107-112
- (2) 『古今東西落語家事典』、平凡社、平成元 (1989)、p. 314-316
- (3) (1) に同じ
- (4) (1) に同じ
- (5) (2) に同じ
- (6) 五代目笑福亭松鶴「天王寺詣り」『上方はなし』、第 11 号、楽語荘、昭和 12 (1937)
- (7) 笑福亭枝鶴「大阪落語 天王寺詣り」『郷土雑誌 上方』、第 3 号、天王寺研究号、上方郷土研究会、昭和 6 (1931)、p. 154-159
- (8) (1) に同じ
- (9) 前田憲司「演者紹介」『昭和戦前面白落語全集 —上方篇— 解説書』、日本音声保存、平成 18 (2006)、p. 30
- (10) 『蓄音機レコード製作所並発行所明細表 昭和 13 年末現在』、内務省警保局図書課、昭和 13(1938)、p. 4-5
- (11) 「ワイヤーレコーダー全史」『大人の科学マガジン Vol. 23 』、学習研究社、平成 21 (2009)、p. 6-11
- (12) 都家歌六『落語レコード八十年史 上』、国書刊行会、昭和 62(1987)、p. 85
- (13) 都家歌六『落語レコード八十年史 下』、国書刊行会、昭和 62(1987)、p. 441

【参考文献】

- * 戸田学編『六世笑福亭松鶴はなし』、岩波書店、平成 16 (2004)
- * 「五世松鶴 噺家五十年」『別冊 上方はなし』、三一書房、昭和 47(1972)、p. 5-35
- * 桂米朝『米朝ばなし 上方落語地図』、毎日新聞社、昭和 56(1981)
- * 豊田善敬『戦後(昭和 20 年～23 年)の上方落語～五代目笑福亭松鶴を中心とした出演記録～』、私家版、平成 21(2009)
- * 『吉本八十年の歩み』、吉本興業、平成 4 (1992)
- * 『吉本興業百五年史』、吉本興業、平成 29 (2017)

資料紹介（資料整理の現場から）

「当る寅歳初春興行 1950 初笑ひ名人会」 ポスター

高草 瞳（上方演芸資料館学芸員）

当館には戦前から現代までの多くの寄席・演芸場のポスターが保管されている。今回は京都の新京極通りにあった寄席・富貴席でおこなわれた興行ポスターについてご紹介したいと思う。

1、富貴席とは

下京区（現中京区）新京極通り蛸薬師上ル東側町 503～505 番地にあった。反対派の総大将岡田政太郎の所有で、1919（大正8）年7月1日新築落成。落語の定席として繁昌したが、1944（昭和19）年5月1日から浪花節の常設館に鞍替えし、時々漫才もやるものの、たいていは浪曲を掛けていた。1948（昭和23）年3月1日から元の落語や漫才の席に戻り、当時の支配人は曾根千晴が勧めた。1958（昭和33）年12月上席を最後に、翌年1月21日から富貴ミュージックホールと改め、ヌードショー専門の劇場となった⁽¹⁾。

今回紹介するポスターは、1950（昭和25）年のものであり、落語や漫才の席として経営されていた頃のものである。

富貴席の専属芸人であった夢路いとし・喜味こいしの著書やインタビューによると、戦後すぐの富貴席は横田興行部が運

営しており、夢路いとし・喜味こいしは経営者であった横田繁雄氏に声をかけられて、富貴席の専属になったといわれている⁽²⁾。

横田興行部について、当館に所蔵されている資料を確認してみた。京都の富貴席のプログラムは現在9点所蔵しており、1953（昭和28）年5月発行のプログラムには「横田興行株式会社」、1949（昭和24）年8月1日発行のプログラムには横田興行社直営」という記載があった。このポスターにも「横田興行社直営」と書かれている。

建物の構造は、一階席は椅子席、二階席は畳敷きであり、囃子場は上手に、楽屋は舞台の下で楽屋口の裏手には墓地があったという。三階は、歌舞連の控室となっていたようだ。舞台の下の

図1 当る寅歳初春興行 1950
初笑ひ名人会 ポスター



楽屋は狭く、舞台の足音が響くほどだったというエピソードなどが多数の芸人により多く語られている^{(2)～(5)}。

2、ポスターに記載されている人物について

左上から

桂春団治【のちの二代目桂春団治】

文ノ家かしく（文の家かしく）

【のちの三代目笑福亭福松】

橘ノ円都

桂小春【のちの三代目桂春団治】

桂文團治

丹波家九里丸【のちの花月亭九里丸】

富貴歌舞道楽連

桂米丸

橘ノ圓【のちの三代目桂三木助】

左下から

林田五郎・柳家雪江

平和ニコニコ・喜音家花楽

夢路いとし・喜味こいし

一陽齋都一【のちのジャグラー都一】

若山梅夫

宝家和楽

アキタA助・B助（秋田Aスケ・Bスケ）

桂春雨・ワカ子

一輪亭花蝶・荒川勝美【のちの松原勝美】

○林田五郎・柳家雪江

このポスターは初春興行であり、当時の新聞広告によると、元旦から～10日までおこなわれていた⁽⁶⁾。

出演者について調査する中で、林田五郎は1950（昭和25）年1月1日に亡くなっているということがわかった。当時の新聞記事を調査してみたところ、12月31日に帰宅後、そのまま目を覚まさず、元旦の午後5時に死亡が確認されたという記事がみられた⁽⁸⁾⁽⁹⁾。

ポスターに記載はされているが、出演することはできなかったのだろう。

○一陽齋都一

当館所蔵の「花月亭九里丸置土産 笑魂系図」や「笑魂系図回答綴」によると、一陽齋都一からジャグラー都一に改名していたことが確認できた。

その時期の「関西演芸協会 大福帳」で、当館が所蔵している資料でこの時期のものでは昭和26年・昭和29年・昭和30年の資料がある。そちらを確認すると、

発行年		表記名
昭和26年	9月吉日	一陽齋都一
昭和29年	申年元旦	一陽齋都一
昭和30年	乙未元旦	ジャグラー都一

昭和29年までは「一陽齋都一」であったが、昭和30年からは「ジャグラー都一」と表記されていた。「一陽齋都一」から「ジャグラー都一」に改名した時期はその期間とみられる。

○荒川勝美

一輪亭花蝶とコンビを組んでいた松原勝美は、「笑魂系図回答綴」によると、最初「荒川千坊」^{あらかわせんぼう}と名のり、その後「松原勝美」に改名したとされている。

当館所蔵の「関西演芸協会 大福帳」によると、「松原勝美」は、昭和 26 年までは「荒川勝美」で記載されており、昭和 29 年には「松原勝美」で記載されていた。

このポスターに記載されている「荒川勝美」は、おそらく「松原勝美」ではないかと思われる。

○富貴歌舞道楽連

当館所蔵のプログラムに「富貴歌舞連」^{かぶれん}が出演しているものがあり、花柳尚子^{はなやぎなおこ}などが歌舞伎舞踊を披露していた様子がうかがえる。

図 2 富貴 プログラム 水無月演芸大会 6 月 1 日～10 日 1953(昭和 28)年 5 月発行



ポスターに記載されている「富貴歌舞道楽連」と「富貴歌舞連」は同一のものであるかどうかは不明だが、「富貴歌舞連」は「歌舞連」と略され、芸人によるエピソードも多数みられた。^{ぶんこう}桂文紅の 1958 (昭和 33) 年の春の富貴席でのエピソードを少し紹介しておく。

(前略) 花柳尚子さんの素顔と対面して意外とお婆さんに驚いたものだ。高座を見ることができ、こぼれるような、あの色気はどこからきたものであろう。「十年前、よく舞台を見させて貰いました・・・」と言葉を交わしている、その横をキリッキリッと滑車をきしませて緞帳が上がる。⁽⁴⁾

花柳尚子の高座がとても華やかであったことがうかがえる。

○出演者同士の関係について

最後に、ふれておきたい背景のひとつとして、喜味こいしが語る富貴席のエピソードを紹介したいと思う。

二代目桂春団治師匠には、私は可愛がってもろてんや。私は息子の今の三代目（桂春団治）と仲が良かったから、「お客さんと飲みに行くから一緒においで」と誘ってくれてな。朝早く富貴の楽屋へ行ったら三代目が来てて、「何してるねん？」と訊いたら「文の家かしく（のちの三代目笑福亭福松を襲名）師匠に踊りを習ってる。」と言う。「ほんなら、わしも習うわ」というてな、落語の踊りを一緒に習ったで。かしく師匠というのは「わしは座布団一枚あれば踊れる」というお方やからね。私は「富士の裾野」だけ教えてもろうたな。⁽⁴⁾

富貴席が戦後、落語や漫才の席に戻ったのは1948（昭和23）年2月1日からであり、夢路いとし・喜味こいしが専属になったのはそれ以降、そして1953（昭和28）年に2月25日には二代目桂春団治が死去している。上記のエピソードが、何年頃のものかは明かされていないが、その間のものである。

○最後に

今回、『資料整理の現場から』の記事として、当館に所蔵している資料の一部を紹介する貴重な機会を頂きました。参考資料とした『笑魂系図回答綴』をはじめとした資料も、大変貴重な資料であり、当館には研究に活用していただけるような資料がまだほかにもあります。一日も早く、様々な方々に利用していただけるよう資料整理に取り組んでいきたいと思いをします。

参考資料（館所蔵品）

花月亭九里丸『九里丸置土産 笑魂系図』1961（昭和36）年1月

『笑魂系図回答綴』1960（昭和35）年6月 笑魂系図の基になったアンケート

『富貴 プログラム』 1953（昭和28）年5月発行
1949（昭和24）年8月発行

『関西演芸協会 大福帳』 1951（昭和26）年9月
1954（昭和29）年1月
1955（昭和30）年1月

【註】

- (1) 橋本礼一編「京都の寄席」『藝能懇話 第十六号 =特集 上方の寄席=』、大阪藝能懇話会、平成 17 (2005)、p95
- (2) 喜味こいし・戸田学『いとこいし思い出がたり』、岩波書房、平成 20 (2008)、p 104
- (3) 桂米朝・上岡龍太郎『米朝・上岡が語る昭和上方漫才』、朝日新聞社、平成 12 (2000)、p 220
- (4) 桂文紅「追憶の寄席“富貴”」『藝能懇話 第三号』、大阪藝能懇話会、平成 2 (1990)、p 126
- (5) 桂米朝『桂米朝集成 第二巻 上方落語 2』、岩波書店、平成 16 (2004)、p 220
- (6) 京都新聞 広告 昭和 25 (1950) 年 1 月 1 日夕刊
- (7) 倉田喜弘・藤波隆之 編『日本芸能人名事典』、三省堂、平成 7 (1995)、p761
- (8) 毎日新聞 昭和 25 (1950) 年 1 月 3 日夕刊
- (9) 京都新聞 昭和 25 (1950) 年 1 月 3 日夕刊

「みなと祭」ポスターの年代調査報告

島田 智子（上方演芸資料館司書）

当館所蔵のポスターは寄席や演芸場のものが多いが、ほかにも芸人が出演した映画や放送番組、催しものの告知など、さまざまな種類がある。それらのなかからここでは、大阪市・大阪港振興協会主催「みなと祭」のポスターを取り上げる。「7月15日・大阪港開港記念日」とあるので開催月日は明白だが、平成27年度から実施している資料整理の過程において、このポスターの登録情報（システムに入力されている発行年）に疑問が生じたため、調査をおこなった。



ポスターの大きさは縦 37.8 cm × 横 53.2 cm（裏打ち縦 38.3 cm × 横 53.9 cm）。左側上から約 1.8 cm のところから斜め右方向に約 14.4 cm 切り取られている。裏面の数ヶ所に文字が書かれており、一部表面から透けて見える。

ポスターには大阪市の市章（みおつくし）が入った船の絵が大きく描かれ、船体には踊るような書体で、白抜きの「みなと祭」の文字がある。空と海が青、船体や文字は黒、各所に効果的に赤が用いられ、非常に目をひく。また、船の進行によって起きる波しぶきか白波か、ポスター中央部の白い部分に祭当日の「もよおし」の内容が詳しく書かれている。まるで絵本のような意匠である。ポスター下部の「日本勧業銀行」は広告主と思われる。

ポスターから得られる情報を確認しながら年代の調査を進めるため、中央部の記載事項を次に示す。

7月15日の もよおし	
船に乗って 大阪港内見学	
午前十時	築港中央突堤乗船場へ
先着一千名に限り御招待（無料）	
みなと祭 演芸大会	
午後一時	築港中央突堤 南側特設会場 （入場無料）
プログラム	
第一部	
港湾関係従事者 素人のど自慢大会	
審査員	NHKのど自慢審査員
アナウンサー	NHK吉田謙司
伴奏	BK上野山正男
のど自慢出演お申込は七月十二日 までに千舟橋大阪市港湾局内係へ	
第二部	
司会	丹波家九里丸
まんざい	林田十郎
曲技	芦ノ家雁玉
浪曲	森 幸兒
第三部	吉田奈良丸嬢
映画「たちあがる大阪港」ほか	

1 「みなと祭」

慶応4年（明治元年）7月15日に大阪港を開港したことにちなみ、7月15日が大阪港開港記念日に制定されたのは昭和7年のことである。同年におこなわれた記念行事が第1回の「みなと祭」で、現在も続いている。⁽¹⁾

ポスターでは「みなと祭」であるが、かつては「港まつり」「港祭」とも表記されており、『昭和大阪市史』には次のように掲載されている。⁽²⁾（本稿では基本的に「みなと祭」とし、引用等の際は原資料の表記に従った。また、新字体を用いることとする。）

港祭 市は昭和七年以来、みなと祭を挙行している。横浜・神戸が『国の港』であるのに反して、大阪港は『市民の港』である。市民の深い理解の下に、測り知れぬ苦心と努力の賜であり、その発展は、如実に市の発展を意味している。それで、慶応四年に大阪港が開港場とせられた日をえらび、七月十五日を大阪港の記念日として、市が主催となり、港の祭を挙行したのである。それは今日の繁栄と将来の飛躍のため、独り港湾関係者のみならず、全市民と共に祝福し、また先人の偉業を追想し、今後の努力を誓うためである。昭和七年の第一回港祭には十四日にラジオ講演が行われ、十五日には築港第二突堤で祭典を挙行し、港内見学・余興があり、ラジオ娯楽放送が行われ、市民は続々港につめかけた。十二年の港祭はあたかも開港七十年に当つたので、水に陸に多彩な宣伝陣がはり巡らされ、全市を、みなと祭一色でぬりつぶしたのであつた。『水の都』大阪は、大阪港の発展によつて、その使命を完うすることができるであろう。

『市民の港』の祭として大阪市が力を入れ、市民にも定着していた様子がうかがえて、ポスターから受ける楽しい印象とも符合する。そんな「みなと祭」の変遷を『大阪港史』第2巻、第3巻をもとにまとめると、次のようになる。⁽³⁾

昭和	月/日	できごと	概要
7年	7/15	第一回港まつり	港湾部主催で第二突堤基部に天幕を張り、厳粛な式典と簡素な祝宴を開催。特設舞台上で種々の余興を実施。
8年	6/26	大阪港記念日協賛会創立	港湾部内に事務所を置く大阪港記念日協賛会が設立され、以後の港まつりはこの会が主催、実施。
10年		第四回港まつり	対外的な余興が企画されたほか、大阪港が市民の港であるとの認識を深めるため、市民による港内見学を実施。
14年～20年		時局の影響により縮小化（余興の廃止・開催場所の変更など）	
21年	7/15	戦後第一回港まつり	戦災に遭った市民の気持ちを慰め、復興への意欲を高めるためにも盛大に開催。 中央突堤の式場近くに模擬店を出し、歌謡コンクールを催す。行事の一つとして、港内見学を復活。
22年	7/10	大阪港振興協会設立	かつての大阪港記念日協賛会および大阪港振興促進会の志を継ぐ団体として大阪港振興協会を設立。港まつりはこの年から大阪港振興協会との共催に。

今回取り上げているポスターの「みなと祭」を大阪市と共に主催している「大阪港振興協会」は昭和22年7月10日設立であることから、このポスターは同22年以降のものであることがわかる。

2 日本勧業銀行

ポスター下部の日本勧業銀行大阪支店は大正7年9月に大阪市東区北浜に新設、同15年東区淡路町に移転し、昭和36年に東区大川町に再度移転している。一方の船場支店は、昭和24年1月に大阪市東区博労町に新設された。

3 関西演芸協会

後援として大阪中央放送局と並んでいる関西演芸協会は、関西の演芸人の団結と親睦を目的として結成されたもので、昭和24年4月23日に発足した。

2、3によりポスターの年代はさらに下り、昭和24年以降と考えられる。

4 丹波家九里丸

プログラム第二部で司会を務める丹波家九里丸とは、第2回に上方演芸の殿堂入りした漫談家、花月亭九里丸のことである。

九里丸の亭号について、和多田勝氏は『笑芸人生劇場 花月亭九里丸伝』のなかで、吉本興業の創始者吉本泰三が直々に「花月亭」と名付けたというエピソードを描いている。そして、九里丸が「花月亭」を「丹波家」に変えたのは昭和22年3月、松竹のもとでの「上方趣味大阪落語の会」出演に際してのことであり、再び「花月亭」に戻るのは、昭和25年3月に泰三の妻せい(9)が亡くなってからとしている。

つまり、九里丸が「丹波家」を名乗っていたのは昭和 22 年 3 月から昭和 25 年 3 月までの約 3 年間であり、この時期に実際に「丹波家」の亭号で活動していたことは、昭和 24 年 11 月の「上方演芸会」放送台本や、本号で当館学芸員の⁽¹⁰⁾高草氏が紹介する 1950（昭和 25 年）富貴ポスター等でも確認できる。

以上のことから、大阪港開港記念日の 7 月 15 日に大阪港振興協会、日本勸業銀行大阪支店と船場支店、関西演芸協会、「丹波家」九里丸が同時に存在したのは昭和 24 年のみとなり、当館のポスターは昭和 24 年の「みなと祭」のものであると推定した。この推定にもとづき調査したところ、次のような資料が確認できた。

○昭和 24 年 7 月 15 日発行の『大阪日日新聞』7 月 16 日（土）夕刊 1 面

「起ち上つた大阪港 ミナトまつり」

大阪港が貿易港として世界の仲間入りをしてから八十二年、きょう十五日はその記念日に当るので大阪市では築港を中心に盛大なミナト祭を挙行、朝十時市のランチ（筆者註：蒸気機関で走る小船やモーターボートなど、連絡用の小艇）にのつて港内見学をはじめ多彩な行事をくりひろげた

この日港頭地域は商店街が軒並に紅提灯をつるし、在港各船は赤、青、黄の信号旗で船体をかざつて祝い、港内見学は一般市民と八幡屋、南、北の田辺小学校児童約二千名が淀丸、大和丸など七隻のランチでお昼ごろまで荷揚げや施設をはじめ港内を見学した
午後一時から夕にかけて中央突堤南側の特設スタジオで港湾関係従業者の「素人のど自慢大会」漫才、浪曲など演芸会、映画「立ちあがる大阪港」などがあつた

○『大阪市政年鑑 昭和 25 年』⁽¹¹⁾ 第 1 部記述編 14 港湾「昭和 24 年の大阪港」

港まつり（開港記念日）

明治元年大阪港開港を記念する第 18 回港祭が例により本市と大阪港振興協会共催のもとに、7 月 15 日の開港記念日を期して盛大に挙行政せられた。

港頭地区において記念余興・対市民宣伝が行われ、港内見学の催もあり、また 6 月に完成した記録映画「起ち上る大阪港」を映写し市民の大阪港への関心と市営港の誇りを新にした。

港内見学や「素人のど自慢大会」、演芸会があつたことは紹介されているが、残念ながら出演芸人についての言及はない。しかし、ポスター中央部に記載のプログラム第三部「映画『たちあがる大阪港』」が映写されたこと、その映画は 6 月に完成したばかりだつたことがわかる。

また、紙数の都合上、プログラム第二部に出演した九里丸以外の芸人（林田十郎・芦ノ家雁玉、^{はやしたじゅうろう あしの やがんぎょく}もりこうじ よしたまきごろう よしたならまるじょう）について詳しく述べることはできないが、いずれも同時代に活躍していたことが、当時のラジオ番組出演、新聞記事、関西演芸協会の「会員大入聚」（会員名簿）、浪曲番付等からうかがえる。

よつて、このポスターは昭和 24 年 7 月 15 日の「みなと祭」のものであると考えられる。

【註】

- (1) 近年は「大阪港みなとまつり」という名称で、7月15日と海の日（7月第3月曜日）を中心に開催されている。昨年（平成29年）は開港150周年にあたり、記念事業の一環として例年より拡大した内容で実施された。
- (2) 大阪市役所『昭和大阪市史 概説篇』昭和26（1951）、p. 89 - 90
- (3) 大阪市港湾局『大阪港史』第2巻、昭和36（1961）、p. 460 - 481、同第3巻、昭和39（1964）、p. 784、790、791
- (4) 日本勧業銀行調査部中村孝士『日本勧業銀行七十年史』、日本勧業銀行、昭和42（1967）、「営業店小史」p. 35
- (5) 樋口保美「戦後の上方落語年表」（『芸能懇話』第十七号）、大阪芸能懇話会、平成18（2006）、p. 51 また、三田純市『昭和上方笑芸史』、学芸書林、平成5（1993）の「[資料2] 昭和上方笑芸年表」（田中鳩平制作、三田純市監修）p. 378 昭和24年（一九四九年）には、日にちの記載はないが「4月 関西演芸協会発足（会長旭堂南陵）」とある。
- (6) 花月亭九里丸については、大阪府立上方演芸資料館 WEB サイト「上方演芸の殿堂入り」<http://wahha-kami-gata.jp/dendou/> 第2回（平成9年度）を参照されたい。
- (7) 和多田勝『笑芸人生劇場 花月亭九里丸伝』、少年社、昭和56（1981）、p. 163
- (8) 同 p. 238 - 240
- (9) 同 p. 248
- (10) 大阪中央放送局台本 昭和二十四年十一月二日「上方演芸会（8）」
五枚目ウラ「十郎 では、皆様、丹波の名産は栗にちなみまして、上方演芸界の名物、丹波家くり丸さんをご紹介します」。
六枚目オモテ「（これにて、丹波家くり丸さんの登場となり、世相ほがらかニュースの漫談となる。）」 * 当館はこの台本のコピーを所蔵している。
- (11) 大阪市役所『大阪市政年鑑 昭和25年』、昭和25年、p. 165
* 「はしがき」に「この『1950年版（昭和25年版）』は原則として昭和24年1月から昭和25年3月31日までの大阪市政の動きを暦年または会計年度に従い記述編・統計編・便覧編にわけて編集収録したものである」とある。

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等

【経緯】

- 平成元年 3月 故砂川捨丸氏の遺族から氏ゆかりの鼓を受領
- 平成2年 1月 上方演芸保存振興検討委員会（会長：井上 宏 関西大学教授）を設置
- 平成4年 3月 検討委員会が基本構想を策定（上方演芸保存振興事業の拠点施設として「上方演芸資料館（仮称）」の設置を提言）
- 平成5年12月 資料館の立地場所を決定（大阪府中央区難波千日前）
- 平成6年 7月 基本構想を受け、府が基本計画を発表
- 平成7年 3月 上方演芸資料館入居予定ビル（YES-NAMBA ビル）着工
- 平成8年 3月 大阪府立上方演芸資料館条例公布
- 同 年 8月 上方演芸資料館の愛称（ワッハ上方）とシンボルマークを決定
- 同 年11月 府立上方演芸資料館オープン（15日）
- 平成21年12月 戦略本部会議決定：①本館の役割は「資料の収集・保存・活用（公演、育成は民）」、②吉本興業からの提案を受け入れ、平成23・24年度は現地存続（但し、目標入館者数40万人を設定し、達成状況等を踏まえ、以降のあり方を検討）
- 平成22年12月 演芸ホールを廃止
- 平成25年 1月 戦略本部会議決定：①当面2年間は、現地において規模縮小の上、効率的に運営（入場料は無料）、②運営費は5千万円以下、原状回復費を含め1億円以下
- 平成25年 4月 展示室・レッスンルームを廃止
- 平成26年 7月 大阪府市文化振興会議アーツカウンシル部会が、今後の方向性を提言（※）
- 平成27年 4月 府の直営（資料整理を行いつつ、今後の方針を検討）

【機能】

開館～22年12月			23年4月～24年3月		25年4月～	
区分	場所	面積 (㎡)	区分	面積 (㎡)	区分	面積 (㎡)
展示室	4階	1,170.991	存置	同左	廃止 (ライブラリ-は9ブースに縮小して7階へ)	-
演芸ライブラリ- (無料)		150.0 (15ブース)				
小演芸場[上方亭] (有料)		98.44 (74席)				
演芸ホール (有料)	5階	1,484.34	廃止	-		
事務室	6階	326.705	存置	同左	廃止	609.943
レッスンルーム (有料)	7階	99.85 (60席)				
収蔵庫		260.00				
(共用部分)		250.093				
合計		3,591.979		2,107.639		609.943

【管理運営】

期 間	管理運営	備 考
開 館 ～14 年 3 月	(財)大阪府文化振興財団	管理運営委託
14 年 4 月～18 年 3 月	大阪府	直営
18 年 4 月～22 年 12 月	(NPO) ニューウエーブ日東大阪	指定管理
23 年 1 月～23 年 3 月	大阪府	直営
23 年 4 月～27 年 3 月	吉本興業グループ	指定管理
27 年 4 月～	大阪府	直営

【歴代館長】

期 間	歴 代 館 長 名
H 8 年 1 1 月 ～	粕林 利男
H 1 1 年 4 月～	井上 宏
H 1 4 年 4 月～	有川 寛
H 1 8 年 4 月～	伊東 雄三
H 2 3 年 1 月～	★大阪府直営<休館>
H 2 3 年 4 月～	河井 泉
H 2 5 年 4 月～	井上 明
H 2 6 年 4 月～	田中 宏幸
H 2 7 年 4 月～	★大阪府直営

大阪府立上方演芸資料館 平成29年度年報

編集・発行 大阪府立上方演芸資料館
〒542-0075 大阪市中央区難波千日前 12-7
YES・NAMBAビル7階
TEL : 06-6631-0884

平成30年6月発行
